

学内広報

2022.8.25

no.1561



富士癒しの森研究所で行われた朝もや音楽会（7月28日）



志ある卓越。



メタバースとしての東大

連携研究機構を軸に進む大学のVR活用の現在

柏キャンパス土地取得完了報告会

連携研究機構を軸に進む大学のVR活用の現在

メタバースとしての東大

VRセンター機構長
相澤清晴VRセンター准教授
雨宮智浩

(上) 143号室 (別名F²プラザ) のドア。
隈研吾先生が設計した室内にはHMD[※]
や運動シミュレーターや元祖「ポケモ
ンGO」的な企画で使ったウェアなど
も！(下) カメラ80台を連結させた3D
スキャンシステム。



※Head Mounted Display

アバターで様々な社会生活を営むバーチャルリアリティ (VR) 空間、メタバースへの注目が高まっています。メタバースとして捉えた東大の現状はどうなっているのか、そしてVRを教育・研究に活用する試みはどのくらい進んでいるのか。連携研究機構バーチャルリアリティ教育研究センター (VRセンター) の機構長と専任教員のお二人にまとめて聞きました。

相澤 VRセンターは2018年2月に発足しました。様々な分野と幅広くつながるVRは連携研究向きだと思います。実は医学では以前から活用が盛んで、日本VR医学会は20

年もの歴史を持っています。専門でなくてもVRと接点がある研究者は多く、そうした人々たちを結びつけるのもセンターの役割です。

VR講演のセキュリティとは？

雨宮 私たちの拠点は工学部1号館の143号室です。令和2年度総長大賞の「バーチャル東大」は、学生チームがこの部屋をバーチャル化する試みから始まりました。別室には本人の姿を保ったアバターを作るためのスタジオがあり、これまでに総長をはじめ関係者数十人を3Dスキャンしてきました。1月には、スタジオ発のアバターで総長が初のVR講演を行いました。国立情報学研究所のシンポジウムの各大学総長講演シリーズで東大が先陣を切ったことに意義があります。この際、講演用と視聴用で会場を二つ用意しました。講演会場に客を入れると講演中に誰かが邪魔をするなど不測の事態が起こる可能性が残るからです。VR講演におけるセキュリティ確保の一つの姿を示せたと思います。

相澤 センターの核をなすのは基礎研究、応用研究、サービスVRの3部門です。サービスVRはサービス業界の活性化にVRがどう貢献できるかを検討し実用を加速する部門。寄附講座を設置し、JR東日本、森ビル、近鉄などの企業とともに、業務の訓練や支援を行うVR技術の開発を行っています。その一つが、空港のカウンターで接客する場面をVR空間に再現し、クレマー対応を学ぶ接

客VRトレーナーです。応答の仕方により客の怒りが変化し、適切に対処すればレベルが下がります。脈拍などの生体計測技術とAIをVRに加えて研修に使う試みが進んでいます。

各部局のVR企画実施を支援

雨宮 私たちは全学の先進的VR研究を支援するプロジェクトも進めてきました。企画を募り、最大50万円と技術支援を提供するものです。手足を失った人にVR治療を施すとどんな効果があるのかを調べる (医学部附属病院)、音痴の人が合唱することで音痴に聞こえなくなるかを検証する (工学系研究科) など、興味深い企画が集まりました (→p.4)。農学部附属動物医療センターのVR院内ツアー企画では、Googleストリートビューのような形で院内を案内しますが、センターの教員がお芝居をするという趣向も加わり、動物視点で入院から退院までを紹介する意欲作が仕上がりました。VRを教育に活用する取り組みを低コストで全学に展開したことは機構の外部総括でも高い評価を受けました。

相澤 今後は大学におけるメタバースのあり方を考える必要があると思っています。今度デジタル技術を駆使した工学分野における教育の場として「メタバース工学部」が設立されるのは象徴的です。実は他大でVRセンターの機能を持つ組織は見当たりません。ノウハウや人も含め、センターは東大の重要なインフラになります。培った経験や知見を学外にも共有しVRの利活用を広げたいです。これは思いつきですが、専任教員のアバターを作るのはどうでしょうか。銅像のかわりにそれらが並ぶ部屋をVR空間に用意する。実物より細くしたり少し若い姿にするのも簡単です。センターのスタジオを喜んで提供します。

東大のVR活用事例集



※1,2はVRプラットフォーム「cluster」をダウンロードすればアクセス可能(アカウントも必要)。6,7はブラウザだけでアクセス可能→<https://vr.u-tokyo.ac.jp>

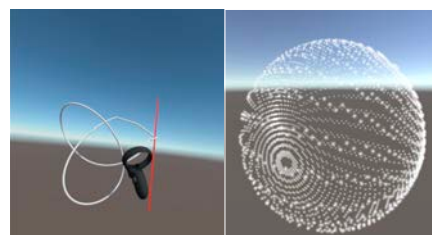
2019年から進展中！VRセンターが支援する全学の研究プロジェクト

1	嚥下運動における複雑な構造変化の可視化と教育応用	医学系研究科	山嶋達也
2	複合現実法を用いた術野と医用画像との融合提示システムの開発と教育への応用	医学部附属病院	山嶋達也
3	肺部分切除術における難易度予測モデルの構築		長山和弘
4	ヒューマンオーグメンテーション学特論実習講義（総合分析情報学特論XII）		厩本純一
5	東京大学制作展におけるバーチャルリアリティ技術を活用した展示支援	情報学環	筧康明
6	学部生によるVRコンテンツ制作のための環境提供		阪口紗季
7	Exploring the Affordances of VR for Undergraduate Interaction Design Education		ハウタサーリアリ
8	ロボット手術VRシミュレーション	工学系研究科	原田香奈子
9	音痴合唱団劇場		小淵祐介
10	VRアバター通信とビデオ通話を用いたオンライン心理支援体験の比較	情報理工学系研究科	谷川智洋
11	生体情報センシングのフィードバックによるVRコンテンツデザイン	新領域創成科学研究科	伴祐樹
12	高齢者の交流促進を目的としたイベントにおけるVRを活用した先端技術教育に関する研究	高齢社会総合研究機構	伊藤研一郎
13	時空を超えた科学館	先端科学技術研究センター	稲見昌彦
14	バーチャル空間における143室の再現	人文社会系研究科	芳賀京子
15	展覧会VRアーカイブの構築と美術・歴史教育への利活用		
16	数学における「概念の可視化」とその教育支援への応用	数理学系研究科	河野俊文

美術館・博物館特別展のVRデータや高精細画像などを利用し、VRアーカイブやデジタル・ミュージアムの構築と、VR美術・歴史教育教示の開発を目指す取り組み。昨年11月の東京都美術館「コートールド展」では、人文社会系研究科と工学部の学生が会場内のVR撮影を行い、データの編集は工学部の学生が担当しました。



現代数学で扱う高次元の物体の直感的イメージを得るため、学生とOBのチームが週1回の作業をミーティングを重ね、VRを用いた「可視化」を検討。VR空間内で結び目の描画と変形と数学的操作を自由に行うツールと、4次元空間内の物体をVR空間内に描くための基本的な機能を実装したツールを開発しました。



1	身体化デザインによるAR天文共同学習環境の開発	情報理工学系研究科	葛岡英明
2	幻肢の運動表象におけるVR治療効果と痛みの性質の役割の解明	医学部附属病院	住谷昌彦
3	VRを用いた一人称体験により認知症の理解と支援行動の動機付けを高める教育プログラムの開発	医学系研究科	五十嵐歩
4	AR技術を用いた手術手技トレーニングシステムの構築		斎藤李
5	バイオセーフティキャンパス内における無菌操作VRシステムの構築	新領域創成科学研究科	伴祐樹
6	“機械を感じる”——デジタルファブリケーションのインタフェースとなる入力データとしての触覚情報——	工学系研究科	山嶋達也
7	ムービーマップによるバーチャルキャンパスの実現	情報理工学系研究科	相澤清晴
8	高精細3DCGを用いたオンライン解剖学実習アプリの開発と教育への応用金	医学部附属病院	金太一
9	附属動物医療センター（VMC）VR院内ツアー		西村亮平
10	附属牧場を活用したVR教育フィールド	農学生命科学研究科	桑原正貴
11	VRを用いた小動物外科手術教材の制作と教育効果の検証		中川貴之
12	小石川植物園のハイブリッドバーチャルツアープロジェクト	先端科学技術研究センター	稲見昌彦
13	高齢者とのTele-SocialActivityを通じた遠隔教育研究活動	情報理工学系研究科	伊藤研一郎
14	VRの議会運営への利活用に関する調査研究	先端科学技術研究センター	牧原出

盲導犬との歩行体験会が各地で開催されていますが、多人数に対する長時間の歩行体験では盲導犬が疲弊する問題が指摘されます。そこで、盲導犬歩行時の主観視点と力覚的体験を表現できるVR技術に着目し、VR空間における盲導犬との力覚的インタラクションを通じて盲導犬の理解促進に資するかを検証するプロトタイプを作成しました。



日本人学生と外国人留学生が共に学ぶ国際研修プログラムの開発を目指した取り組み。日本文化や先住民族の文化と歴史を理解し、他の多様な文化との比較考察を行って議論しました。オーストラリアの提携大学とともに、オンライン語学研修と異文化交流、スタディーツアーを含むバーチャル国際研修も実施しました。



1	VRを開発プロセスに組み込んだ新しいあそびをつくるハッカソン	情報学環	伊達 亘
2	「インタラクティブ4DCG」を用いた頭蓋底手術シミュレーションの教育への応用	医学部附属病院	金太一
3	ウィズコロナ時代の助産師教育における、VRを用いた分娩介助技術に関する教材の開発と評価		笹川恵美
4	VR技術を用いたうつ病のスティグマ軽減を目的とした教育アプリの開発	医学系研究科	香山綾子
5	VR技術を用いた疑似盲導犬歩行体験プロジェクト	新領域創成科学研究科	渡邊学
6	VR空間を活用した異文化交流・多文化共生経験を高める国際研修プログラムの開発	総合文化研究科	佐藤みどり
7	VR/AI技術を活用した地域連携のためのフィールド調査	先端科学技術研究センター	牧原出
8	ムービーマップの観光業への応用と現実世界融合の模索	情報理工学系研究科	澤邊裕紀

柏キャンパス 用地取得完了報告会

二十数年越しの大計画に
ひと区切り

7月4日、柏キャンパス用地取得完了報告会が安田講堂において開催されました。21世紀における新たな学問の発展に向け、本郷、駒場に次ぐ第三の主要キャンパスとして二十数年間にわたって整備が進められてきたのが柏キャンパスです。2021年3月に全約36.6haの土地取得が完了したのを記念して行われた報告会には、学内関係者のほか、柏キャンパスの各部局の歴代研究科長、研究所長等および歴代の財務担当理事など、約100名が出席しました。



藤井輝夫総長からは、「知の冒険」、多様な次世代リーダー育成、次世代環境都市構築など、まさにUTokyo Compassの視点に基づく対話による連携活動が進んでいるのが柏キャンパスであり、今後は世界の公共性に奉仕する大学としての研究教育活動がさらに発展することを期待しているとの式辞が述べられました。

来賓挨拶で登壇した吉川弘之先生は、大学紛争後の東大には教育環境の劣化を何とかしないといけないという大きな課題があったということから話を始めました。大学院重点化構想の議論もあり、本郷と駒場だけでは手狭なことが明らかとなって近郊に土地を求めた東大。柏への移転計画が浮上したのは森巨総長の頃でした。各部局で移転に関する議論が始まるなか、工学部の議論をまとめたのが吉川先生でした。当初は学科ごとに教員を何人出すのかという議論が主だったのが、話を重ねるなかで次第に学問の本質に迫る議論になっていったそうです。過去の蓄積を受け継いで深めること、社会の要望に応えること、そして従来の構造に収まらない新しい知を生むこと。この3つが学問には必要であることを皆で確認し、3つ目の役割を担うものとして柏が位置

付けられました。手狭なキャンパスの補完地から学問の三極構造を担う重要拠点へと位置付けが変わったことで、移転の機運は高まります。資金面、ポストの問題、地域とのご縁をどうするかなど、難題は順次クリアされたのでした。柏キャンパスは学内外の人々による努力の賜物であり、学問は決して一人ではできないものであること、社会との関係が重要であることをあらためて感じたと言った第25代総長の率直な言葉に、会場の約100名の関係者は大きな拍手を送りました。

その後、文部科学省大臣官房審議官の里見朋香様、柏市長の太田和美様のお二人にも来賓挨拶を頂戴し、柏キャンパスを本拠とする、新領域創成科学研究科長の出口敦先生と物性研究所長の森初果先生が、経緯と現況を各々報告。基調講演を行った卓越教授の梶田隆章先生からは、当時の宇宙線研究所にとっては夢のような移転だったこと、柏キャンパスの顔となるものを作りたいと願っていることなどが語られ、20年前には雉が鳴いていたという貴重な報告もありました。最後に執行役・副学長の津田敦先生が、柏キャンパスに壁がないことには大きな意味があると述べて報告会を締めくくりました。

柏キャンパス整備史

1996	第一期土地取得完了（南東側・約11.6ha）
1999	第二期土地取得完了（南西側・約12.1ha）
2000	物性研と宇宙線研が移転 柏保健センターを設置
2001	新領域生命科学研究所が移転
2003	環境安全研究センター柏支所を設置
2004	新領域基盤科学研究系が移転 柏図書館を設置（正式開館は2005年）
2005	人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、高温プラズマ研究センター、気候システム研究センターが移転

2006	新領域環境学研究系が移転
2007	IPMU（後のKavli IPMU）を設立
2008	柏の葉国際キャンパスタウン構想を策定
2009	海洋研が移転（翌年に大気海洋研に改組）
2011	第三期土地取得完了（北西側・約7.6ha） 情報基盤センターの一部と高齢社会総合研究機構の一部が移転
2014	文書館柏分館を設置
2017	生研附属千葉実験所が移転
2021	第四期土地取得（北東側・約5.3ha）を完了
2022	柏FUSIONフィールドを設置



海と希望の学校 in 三陸

第21回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取り組み——です。5年目を迎え、活動はさらに展開していきます。

地域に根ざした海を学べる空間に

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門特任研究員

吉村健司



2021年4月18日に「おおつち海の勉強室」(以下、勉強室)が開室して1年が経ちました (No. 1547参照)。これまで、岩手県内の学校を中心として多くの方に利用していただけてきました。コロナ禍ということもあり、一般の方の利用は原則、水曜日(予約制)となっていたため、必ずしもフラッと立ち寄れる場所とはなっていませんでした。

週末の蓬萊島(ひょうたん島)には地元の子供や観光客がよく訪れます。そうした方々にも、我々の成果を見てもらいたい、海の面白さを伝えたいという思いから、5月からは平日に加え、週末にも開室を始めました(予約制をなくし、5月中は土曜日と日曜日、6月からは日曜日の開室)。

週末開室後、大槌町からだけでなく、盛岡市などの内陸からも多くの方に足を運んでいただきました。これまでに123名の方にご利用いただきました(5月7日~7月24日集計分)。ご来室いただいた4割ほどの方が蓬萊島観光に来た際に、立ち寄っていただいたようです。ご家族でお越しいただくことも多く、子供たちが楽しむ光景も多く見受けられました。また、週末開室としたことで、地域のイベントの一つに組み込んでいただくこともあり、これまで来られなかった方々にも展示を見学いただくこと



おおつち海の勉強室

ができました。



勉強室では夏休みの週末に、昨年に引き続き夏休み企画として「海のおはなし会」を開催しました。週末開室の際にとった来室者へのアンケートで希望のあった話題として、第1回目(2022年7月31日)は峰岸有紀准教授によるサケについてのお話でした^{*}。サケの回遊についてクイズ感覚で考えてもらったり、鱗を顕微鏡で覗いて年齢を査定したり、サケについてしっかり学べる1時間でした。参加者の方からは昔の大槌川でのサケの様子なども聞かせていただき、非常に充実した会となりました。

勉強室にお越しいただいた方々からは、今後の運営の参考になるご指摘をいただきました。来室された多くの方々からは「また来たい」、「イベントがあれば来たい」という声を寄せていただいております。今回いただいた意見を反映しつつ、今後は大槌の海の魅力を発信するだけでなく、誰もが地元の海や三陸の海への理解を深められる空間、そして地域に根ざした場所となるように努めて参ります。

^{*}第2回(8月7日)は「エビ・カニの仲間と体のしくみ」、第3回(8月21日)は「実は知らない!?大槌湾の生物多様性」と題して開催。



海のおはなし会



サケはどこを回遊してるかな?



親子で展示を楽しむ



「海と希望の学校 in 三陸」公式 Twitter (@umitokibo)

制作: 大気海洋研究所広報戦略室(内線: 66430)



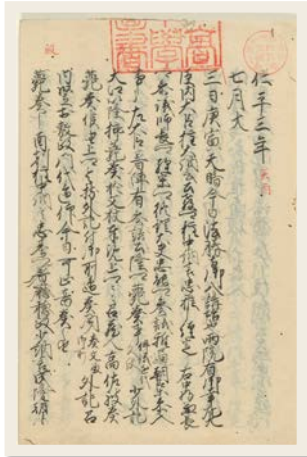
デジタル万華鏡 第30回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

史料編纂所 准教授

藤原重雄

一高本『本朝世紀』

一高本『本朝世紀』の最終冊（四七）
本文冒頭

駒場図書館には、旧制第一高等学校（一高）で所蔵した図書類が「一高文庫」として保管され、東大OPACから詳細検索＞文庫区分「一高文庫」にて書目が通覧できます。割合からは一般的な出版物が大半を占めますが、現在では和漢古書として扱われ

る書籍も含まれています。それら古典籍は、近代の洋装・鉛活字本が出版されるまで、また以降も現用図書として参照される書目もあったようですが、次第に現役を退いてゆきます。2005年に大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館にて、故・義江彰夫先生の企画で「王朝貴族の装束展」が行われ、史料編纂所の画像史料解析センターを中心に協力しましたが、その頃は博物館と図書館とで一高関係資料の保管体制を整理していました。その折にも気になっていたのが、一高本『本朝世紀』（江戸時代写）です。あいにく写本の成立や伝来については不詳です。

日本史学の研究、とくに古代・中世史では、主要な史書を取めた叢書『新訂増補 国史大系』は重要です。2022年3月にはJapanKnowledgeで電子版のサービスが開始となり、使用頻度の高い史料編纂所で購入し、全学でも利用可能です。『本朝世紀』はその一書目で、平安時代史研究の基礎文献です。『新訂増補 国史大系』では、諸写本・版本を比較して基軸となる底本を定め、他本により文字を改めたり、読解に資する異同を注記しています。『本朝世紀』の底本は伏見宮家本（鎌倉時代写）ですが、残存部分が限られ、一高本が全体の半分以上の底本となっています。史料編纂所から画像をWeb公開している宮内庁書陵部所蔵の伏見宮家本に加え、2022年2月に一高本『本朝世紀』の画像公開が開始され、底本の字句をインターネット環境で確認できるようになりました。『新訂増補 国史大系』本の刊本としての質は高いものの、写本で読むことによる喚起力は、研究を深めるのに欠かせません。

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ichiko/item-set>

蔵出し！
文書館

ぶんしょかん

The University
of Tokyo
Archives

第39回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

小泉八雲のすがた

夏になるとテレビ番組で怪談話などが放送されるのを目にします。私も決まって夏になると愛読書である『耳なし芳一のはなし』という本を手にとってしまいます。「耳なし芳一」や「雪おんな」などの怪談話が集められた本ですが、これらの作者であるラフカディオ・ハーン Lafcadio Hern (1850-1904) こと小泉八雲がかつて東大で教師をしていたことはご存じですか？

熊本第五高等学校、神戸クロニクル社の勤務の後、当時の文科大学長外山正一に招聘され、1896（明治29）年～1903（明治36）年まで文科大学講師として英語と英文学を担当しました。八雲は着任前に日本に帰化していましたが、『文部省往復 明治二十九年』（S0001/Mo110）に綴じてある職員調（明治29年9月末現在、文部大臣報告）によると、年俸4,800円で外国人教師と同じ待遇だったことがわかります。ちなみに総長は3,500円、文科大学学長は1,600円、文科大学にいた外国人4名の教師は1週間の講義時間もほぼ同じでエミール・エックが1,500円、カール・フローレンツが3,600円、ルートヴィヒ・リースとラファエル・フォン・ケーベルは4,440円、前任のアメリカ人教師オーガスタス・ウッドは4,200円であり、八雲が高く評価されていたことが見て取れます。

さて、今回の蔵出し資料は八雲の姿が写る、1897（明治30）年文科大学卒業記念写真です（F0025/S05/0235）。



図書館にて卒業証書授与式、三四郎池の端では集合写真が撮影されました。八雲がどこに写っ

ているか分かりますか？ 写真中央には当時の総長である濱尾新、その左隣には八雲を呼び寄せた外山正一、ケーベル、フローレンツが並んでいます。八雲はというと、前列右から5番目、リースとエックの間にフロックコートの正装した姿で写っています。

子どもの頃から愛読書の扉絵で見た横顔の写真。その八雲が確かに東大にいたのだと信じられた、当館で唯一の小泉八雲が確認できる写真をご紹介します。



中央が八雲

（主事員 村上こすえ）

ワタシのオシゴト 第195回

RELAY COLUMN

文学部学生支援チーム
(学部担当)

川合ゆり華

蟬しぐれのキャンパスで

正門から安田講堂に延びる銀杏並木通りと三四郎坂の緑の間、アーケードが象徴的な法文2号館の1階にある文学部事務室が、今の職場です。

私のオシゴトは、文学部学生の履修・成績に関する

ことや、時間割管理を中心とした教務全般。表からは見えない部分も意外と多いのですが、大きな柱の一つである授業をはじめ、どの業務も学生生活に密接に関わっていると思うと、やりがいと責任を感じます。

現職に就いたのは、コロナ禍の始まりとともに慌ただしく新学期を迎えた2020年4月。気がつけばあっという間に2年半が経とうとしていますが、未だに至らぬ点も多く、自分の頭の固さや力不足にもどかしさを感じることもばかり。フォローしてくださる周りの方々や先生方の優しさに感謝しつつ、柔軟に動けるよう研鑽を積み重ねばと思う日々です。



趣味の楽器たち (ウクレレ&バイオリン)

そんなことを考えながらふとキーボードを打つ手を止めると、三四郎池側の窓から止んでいた蟬の大合唱が。このコラムが掲載される頃には、多少暑さも和らいでいるでしょうか……。

得意ワザ：火事場の馬鹿力（よく言えば）

自分の性格：のんびり、おおざっぱ、負けず嫌い

次回執筆者のご指名：井上美里さん

次回執筆者との関係：バンドのバイオリンパートの仲間

次回執筆者の紹介：行動力、華やかな音色、落ち着く歌声



法文2号館のアーケード前で

ぶらり
構内ショップの旅

第6回

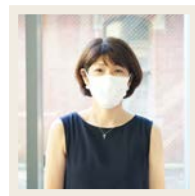
UT cafe BERTHOLLET Rouge @本郷 の巻

こだわりの冷製スープ

福武ホールの1階にあるフレンチカフェ、UT cafe BERTHOLLET Rouge。店名の「ベルトレ」はオーナーシェフの柳館功さんが、フランスで修行していた時に住んでいた通りの名前だそうです。開放感のあるガラス張りの店内、そしてテラスでは、サンドイッチや肉料理、そしてパスタなどを食べることができます。

ランチメニューは、月、火、木がパスタランチ（ドリンク付き1,100円）。水、金は肉がメインのワンプレートランチで、ライス、サラダ、そしてミニデザートがセットになっています（ドリンク付き1,200円）。他にも、ラザニアやスープなど曜日に関係なく食べられるメニューもあります。

2008年の開店当初は、パスタランチを求めて来る人が多かったそうですが、徐々に肉料理の認知度も上がってきていて「力を入れてきたので嬉しいです」と責任者の渡辺圭子さんは話します。



責任者の渡辺圭子さん

特筆すべきは、月1回くらいの頻度でメニューに登場する鴨のコンフィ。本店のフレンチレストラン Reims Yanagidateで作っている一品で、これを目当てにくるお客さんも多いとか。渡辺さんの一押しは、店内で仕込んでいる野菜たっぷりのスープ。野菜は某三ツ星レストランと同じところから仕入れていて、香りが豊かだそうです。また、少しでも安く仕入れるために、曲がっていたり、小さかったりといった野菜も積極的に取り入れています。フードロス削減にもつながると渡辺さんは考えています。暑い夏の間は、ズッキーニの冷製スープをぜひ試してほしいそうです。他にも牛乳の配合にこだわったソフトクリームや、本店で作ったローストビーフを使ったサンドイッチ、そしてキッシュなどがあります。美味しいものを食べてもらいたいとスタッフ全員で考えてきたこれらの料理は、お店のインスタグラムでも紹介しているので、チェックしてみてください。



営業時間 ● 9:00-17:00 (LO 16:30)
ランチは11:30-14:00

じわじわと認知度が高まってきたズッキーニの冷製スープ。

www.instagram.com/ut_cafe_berthollet_rouge/

インタープリターズ・第180回 バイブル

総合文化研究科 准教授 豊田太郎
科学技術インタープリター養成部門

Journalist-in-Residenceはあそび?

Journalist-in-Residence (JIR) とは、新聞雑誌等のジャーナリストが大学や研究機関の番記者となって頻繁に研究室に出入りし、時には研究の議論にも参加して、マスメディアで発信する活動である。日本ではインターネットの普及により廃れてしまった取材のやり方の一つだそう。今回、私が参加している研究プロジェクト^{*}でJIRが始まったことから、私自身の体験もあわせて、JIRを紹介したい。

数年前、私はある出版社より新書を執筆する機会をいただいて筆を進めたが、次第に書けなくなり遂に辞退した。なぜ書けなくなったのか、当時は自覚できなかった。しかし後日、「科学系の新書は科学ファンが読み手で、科学ネタで“あそびたい”という心情に寄せればウケる」という科学コミュニケーション専門家の話を聞いて、合点がいった。執筆時の私は「研究成果一つ一つの努力や重みを“あそび”のネタにはできない」と感じ、研究を相対的に捉える心の“あそび”が欠けていたのである。私自身も講義では、受講生への伝えやすさを優先して他の研究者の研究成果を“あそんで”いることにハッとし、しばし悩んだ。

この経験の後、SF作家の藤崎慎吾氏による連載ルポで取材を受ける機会があった。そのルポでは、私の研究室で行われている研究内容が、親しみやすく、かつ本質をとらえた表現でまとめられていた。「餅は餅屋だ」と感銘を受け、悩み解消の糸口になると直感した。

2020年に始まった上記のプロジェクトで、私は先端の基礎研究を推進するだけでなく、その成果を如何に社会イノベーションに接続できるかという課題に、科学技術社会論を専門とする田中幹人教授（早稲田大学）と協働して挑戦している。その一環で始まったのがJIRである。しかし、JIRに参加した3名がメディア発信する思惑は、科学者側のそれと違っていた。そこで、メディア発信のための共通ルールから対話し始め、共同して学術イベントを数回ほど開催する経験を通じて、科学者側は立場の違いを、ジャーナリスト側は各研究課題の本質を、各々理解することに努めている。傍観ではなく併走して、共に“あそべる”関係を構築し、そのアウトプットが産業界・社会で受容され、そこからまたインプットが得られる好循環のロールモデルを目指している。

^{*}日本学術振興会学術変革領域研究(A)「分子サイバネティクス」HP (<https://molcyber.org/>)

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp>

ききんの [き]

寄付でつくる東大の未来

第34回

渉外部門 堺 飛鳥
シニア・ディレクター

米国の寄付集め&アラムナイ事情

今年5月にファンドレイジング（寄付集め）における世界の最先端である米国の各大学を訪問し、最新事情の調査をしてきました。現在、私立公立問わず、全米トップ校では、ファンドレイザーの数は1校あたり数百名で、年間数百億円を集める規模となっています。

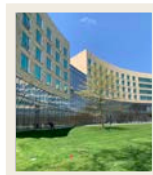
この規模の違いが生まれる理由の一つに、米国では、学長・理事・学部長・研究科長などの大学の幹部が、ファンドレイジングを大学運営の最重要課題と位置づけ、深くコミットメントしている点が挙げられます。大学幹部は仕事や時間配分において、少なくとも半分以上、人によっては8〜9割をファンドレイジング活動に充てています。ファンドレイザーだけに任せておけばよいものではなく、大学運営の中心として取り組むべき課題なのです。

建物名は大口寄付を集める有効手段となっています。かつては研究者の名前を冠することが多かった建物や研究所名は、今では支援者の名前がつけられていることがほとんどです。例えば、NYU（ニューヨーク大学）はLangone氏の寄付への謝意としてメディカルセンター名をNYU Langone Healthと変更しました。さらに建物の中の各部屋やホールは、また違う寄付者の名前が付けられています。

ファンドレイジングの方法も変化をみせています。支援者への個別訪問やガラ・ディナーなどの昔からの方法に加え、近年盛り上がりを見せるのは「Giving Day」というオンラインを中心とした寄付募集イベントです。在校生、卒業生、教職員などを巻き込んで、Giving Dayの24時間に集中して寄付を集めるのです。例えばコロンビア大学では、スポーツイベントや、大口寄付者からのマッチングギフト獲得を競っての学部対抗コンテストなど、様々な企画が行われ、SNSでリアルタイムの広報展開がされて盛り上がります。

卒業生からの寄付がますます重要となっている点も見逃せません。卒業生マネジメントとファンドレイジングは切っても切り離せない関係として、全ての大学で一体として運営されています。部活やクラス、地域などの同窓会ごとにチャリティーイベントを行い、大学への貢献を通じて学生との交流やOBの結束を固めています。

東京大学にも活用できるアイデアにたくさん触れることができたので、今後の寄付募集活動の充実へと繋げていきたいですね。



TATAの寄付で建てられた校舎（ハーバード大学）

東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
7月12日～8月5日	定量生命科学研究所、社会科学研究所、空間情報科学研究センター、生産技術研究所、情報学環・学際情報学府、人文社会系研究科・文学部、新領域創成科学研究科、相談支援研究開発センター、未来ビジョン研究センター、東洋文化研究所、附属図書館、理学系研究科・理学部、地震研究所、総合文化研究科・教養学部、総合研究博物館、農学生命科学研究科・農学部、物性研究所、医科学研究所、史料編纂所、先端科学技術研究センター、農学生命科学研究科・農学部、情報理工学系研究科、数理科学研究科、広報室	定量研の国際化とD&I 障がいを持つ方・日本語を使わない方など、誰もが安心して働ける環境の整備 女性教員の積極的な採用 すべての人に安心を——施設の整備を例に—— 情報×社会によるD&Iの推進 文学部におけるD&Iの実践 想像×科学×倫理（研究倫理ワークショップ） 多様な構成員が支えあうキャンパスの実現に向けて 声をひろうために 研究資源の多様性、研究環境の包摂性が創造する新しいアジア研究 総合図書館におけるD&I推進の取組 理学と多様性 海外からの研究員・留学生の受け入れ・交流推進 駒場キャンパスSaferSpace（KOSS） 総合研究博物館における取り組み 弥生インターナショナルデー D&Iは物性科学を変えるか？ 男女共同参画事業の強化、女性および外国人サポート体制整備 史料編纂所におけるD&Iへの取り組み 包摂社会共創の拠点を目指して 産前・産後休暇制度の運用改善 カンパセーション・テーブル もっと、あなたらしい情報学へ 前期課程D&I教育 ハラスメントのない数理、数学科を ダイバーシティ推進室／UTokyo D&I アクションとメッセージ
7月12日～19日	広報室	研究者が薦める映画.10『太陽の墓場』ロシア史研究者・池田嘉郎 研究者が薦める映画.11『竜とそばかすの姫』分子遺伝学者・村上善則 情報とスパコンと産学連携の柏IIキャンパス／『淡青』44号
7月12日	本部広報課	柏キャンパス用地取得完了報告会を開催
7月14日	情報理工学系研究科	第一回 東京大学データサイエンティスト養成講座シンポジウムを開催
7月15日	総合文化研究科・教養学部	地域文化研究専攻の木宮正史教授が大平正芳記念賞特別賞を受賞
7月15日～8月5日	広報室	自然科学研究機構 川合眞紀様 早稲田大学 ドミニク・チェン様 宇宙飛行士 山崎直子様 ハーバード大学 Naoka Murakami 様 アーティスト スズツニ子 様 食品ロス問題ジャーナリスト 井出留美様 生産技術研究所 Dea Luma 様 弁護士・元最高裁判事 宮崎裕子様 国際農水産業研究センター 白鳥佐紀子様／UTokyo D&I 応援メッセージ
7月20日	本部協創企画課	三井不動産東大ラボ 映像「メタバースとスマートシティ」を公開
7月21日	総合文化研究科・教養学部	子どもたちが自分らしさを発見・探究する仕組みづくりに向けた連携協定締結
7月22日	本部渉外課	「東京大学緊急人道支援基金」の支援方法が増えました
7月26日	本部施設企画課	文京区と東京大学が基本構想の手交式を実施
7月28日	本部情報戦略課	【注意喚起】東京大学を装った迷惑メール（なりすまし）にご注意ください
7月28日	本部学生支援課	ヨット部ディンギー班が第61回七大戦ヨット競技で総合準優勝！
8月2日	本部協創課	第7回Beyond AIサイエンスカフェ（村山斉先生）動画を公開
8月8日	未来ビジョン研究センター	多様な方法で自然が育む人間のウェルビーイング

表紙について／癒しの森の朝もや音楽会2022

7月28日早朝、山梨県の山中湖畔にある農学生命科学研究科附属演習林富士癒しの森研究所にて、「癒しの森の朝もや音楽会2022」が行われました（主催：「癒しの森で親しむクラシック音楽と森の時間」実行委員会 共催：富士癒しの森研究所）。コロナで疲れた心を癒そうと2020年8月に開催された音楽会に続いての出演となったのは、NHK交響楽団の弦楽トリオ、Classic Encourageの皆さん。新しい音楽の形を地域の人たちとともに育てたいとの思いから、前日に行われた「湖畔の夕涼み音楽会」にも出演し、翌日の小中学生向けワークショップにも参加しました。朝6時、朝もやに包まれた森で幕を開

けた音楽会では、山中湖愛にあふれる3人がゴルトベルク変奏曲（J. S. Bach, Goldberg Variations BWV988）を演奏。地元のお客様約100名が、朝食を食べながら、シートを敷いて寝転びながら、犬とともに、など、思い思いのスタイルで耳を傾けました。奏者の腕が止まって楽器の余韻がおさまると、小鳥がさえずり、やがて林内に拍手が湧き上がったのが印象的だった、と研究所長の齋藤暖生先生。癒しの森研究所では、社会連携活動であり研究の一環でもあるこの貴重な試みを今後も続けていく予定です。※この演奏会の模様はYouTubeで閲覧できます。<https://youtu.be/BxLAqbjjvcs>



（上）演奏する Classic Encourage（Violin 大宮臨太郎、Viola 坂口弦太郎、Cello 山内俊輔）の皆さん。（左）犬も聴き入る演奏会！（右）講義室オープンテラスのステージ。
Photo by Hiroshi Takano - SHINME



CLOSE UP ヨット部ディンギー班が七大戦で総合準優勝！

（本部学生支援課）



（上）主将と470級チームリーダーのペア
（下）ヨット部集合写真

7月16日から18日にかけて宮城県名取市閉上ヨットハーバーで第61回全国七大学総合体育大会（通称：七大戦）のヨット競技が開催され、ヨット部が総合準優勝、国際スナイプ級では優勝という成績をおさめました。ヨット部が本競技で総合準優勝となったのは東京大学が主管校として開催された第34回大会以来27年ぶり、国際スナイプ級で優勝となったのは記録が残っている1990年以降で初めての快挙です。

全国七大学総合体育大会のヨット競技は国際470級と国際スナイプ級の2クラスが実施されており、全レースの得点の総和が低いほど順位が高くなります。今回ヨット部からは各クラス2艇が出場しました。国際スナイプ

級では最終レースを控えて京都大学を1点差で追う展開でしたが、本学ヨット部が実力を発揮し、見事優勝を勝ち取りました。国際470級でも準優勝となり、本競技で27年ぶりの総合準優勝となりました。

ヨット部ディンギー班主将の調さんは「今大会は、濃霧などのコンディション不良で一時レース実施が危ぶまれましたが、レース運営の奮闘により結果としては充実の6レースをこなすことが出来ました」「我々の最大の目標は全日本インカレ総合入賞です。春季関東インカレでの29年ぶり総合5位入賞、そしてこの七大学戦総合準優勝の勢いをそのままに、あと3ヶ月、駆け抜けて参ります！」などとコメントしてくれました。



CLOSE UP 文京区と基本構想の手交式を実施

（本部施設企画課）



文京区の成澤廣修区長と藤井輝夫総長

7月25日、文京シビックセンター（文京区役所）にて、「東京大学と周辺地域の連携による東京大学本郷地区キャンパスエリア活性化に向けた基本構想」を成澤廣修文京区長へお渡しする手交式を行いました。この構想は、昨年公表した基本方針「UTokyo Compass」の目標実現に向け、キャンパスと周辺地域を含めた「本郷地区キャンパスエリア」の活性化を図るもの。本学にふさわしい教育研究環

境を整備し、地域の発展を推進し、地域との連携を強化することを目的に策定されました。多様性と包摂性を尊ぶ開かれたキャンパスの形成、キャンパス内屋外空間の一層の活用、歴史的風致の保全と最先端教育研究・医療環境の整備、地域が抱える社会課題への貢献、新たな「大学のあるまち」の創生という5つの基本方針をもとに、地域社会と一体で「まち」の活性化を目指します。



CLOSE UP データサイエンティスト養成講座シンポジウムを開催（情報理工学系研究科）



6月30日、東京大学データサイエンティスト養成講座（DSS）は、「データサイエンス・AIバブルは続くのか？」をテーマに第1回シンポジウムを開催しました。DSSは2016年に情報理工学系研究科主導で開始された全学の大学院生が対象の教育研究プログラム。情報理工学系研究科の須田礼仁研究科長①の挨拶に続き、山西健司教授②と立教大学の大西立顕教授③が基調講演を行い、続いて久野遼平講師④が「DSSの歩みと今後」と題して講演を行いました。後半には、DSS修了生の南賢太郎さん（Preferred Networks）、宮口航

平さん（IBM東京基礎研究所）、DSSに参加しデータを提供している企業6社（電通、コマツ、みずほ銀行、楽天カード、トヨタ自動車、GMOペイメントゲートウェイ）による講演が行われました。産学連携で生まれた成果に紹介に加え、企業におけるデータサイエンティストの業務や求められる役割、学生時代からビジネスドメインに触れることの重要性など、データサイエンティストを目指す学生にとって大いに参考になる話題が続きました。シンポジウムには189名（オンサイト78名、オンライン111名）の参加がありました。



CLOSE UP 「Beyond AI サイエンスカフェ」をYouTubeで公開（本部協創課）

（本部協創課）



第6回「脳は作れるのでしょうか」より

Beyond AI 研究推進機構のBeyond AI サイエンスカフェは、AIの研究者とモデレーターとの対談形式で、一般の方々から募集した質問に答えながら最先端のAI研究内容の社会発信を試みる動画シリーズです。「脳は作れるのでしょうか」をテーマにした第6回では、人工脳組織を用いた脳機能解明に関する研究を進める池内与志穂准教授（生産技術研究

所）が登場。「どうして宇宙は今の姿になったのか？」をテーマにした第7回では、量子ゆらぎから天の川銀河の形成史の解明を通じたAIの進展をテーマに研究を進める村山育教授（カブリ数物連携宇宙研究機構）が登場。研究プロジェクトがAIを通してどのように進展しているのか、YouTubeでご確認ください。
<https://beyondai.jp/contents/events/>



あの戦争

8月なので戦争の話をして。小学生だった1970年代半ば、近所の空き地にうち捨てられた長めの竹筒を工作の材料とするために友人と運び、通りがかりの男性に「君たち、爆弾三勇士ごっこをしているのかね」と尋ねられた。何と誤解されたのかわからないまま否と答えたが、爆弾三勇士とは、1932年の第一次上海事変の際、竹片で爆弾を包んだ破壊筒を用いて中国軍の構えた鉄条網に突破口を開く作戦に従事し、生還に失敗して爆死を遂げた3人の日本軍兵士が報道によって英雄視されたものであることを後年に知った。今にして思えば、55歳定年が主流だった当時、小学生が初老と感じた男性は現在の私よりもだいぶ若く、少年のころ「爆弾三勇士ごっこ」を遊んだ世代だったのではなかろうか。経過した時間以上の時代錯誤を「爆弾三勇士ごっこ」に感じるのは、「あの戦争」に大きな時代の区切りを認めるからに他ならない。

私の専門とする日本の中世において、当時から大きな時代の転換点と認められて「あの戦争」と呼ばれたのが、1467年に生起して11年間続いた応仁の乱である。この戦争を機に頻出する「一乱（いちらん）」という言葉に注目したい。早く1470年に「一乱のあいだ」つまり「（現時の）戦争が続くうち」

との文言であらわれ、乱の終わる1477年に「一乱の始めに至るまで」すなわち「（今回の）戦争が起きるまでは」と見え、終結後は「一乱以来」のように「（この前の）戦争以降」という文脈で多用された。「一乱」一語で応仁の乱をさす事例は1530年頃まで少なからず所見する。「一乱」とは戦争の謂であり、いわば「この戦争」そして「あの戦争」なのである。京都では20世紀まで「この前の戦争」が応仁の乱をさしたという都市伝説も、その延長線上に位置づけられようか。それでも、応仁の乱が「一乱」一語で多く呼ばれた期間はおおよそ半世紀であった。世代交代がすすみ、戦乱が継起するなか、「応仁の一乱」のような呼称が増えたのである。

片や、アジア・太平洋戦争は、今なお「あの戦争」として語られる。あるいは、単に「戦争」と呼び、「戦災」の一語で同戦争による罹災をいうのも同じことだ。平均寿命の違いを考えれば同等と言えないこともないが、「あの戦争」と呼ばれる期間で応仁の乱を超えた。もう「爆弾三勇士ごっこをしているのかね」と訊く大人はいない。

末柄 豊
(史料編纂所)

